

パリ協定実現のカギを握るのは、
企業や自治体といったプレイヤーたちの
率先行動と、それを支える脱炭素技術である。

第17回

(株)セブン&アイ・ホールディングス(前編)

(株)セブン&アイ・ホールディングス 執行役員 経営推進本部
サステナビリティ推進部 シニアオフィサー

釣流 まゆみ氏

聞き手

WWFジャパン 環境・エネルギー専門ディレクター

小西 雅子

店舗運営に伴うCO₂排出削減の追求 省エネ・創エネ・再エネ調達を柱に

グループのシンボルでもあるセブン-イレブンの店舗に最新の設備と技術を採用した省エネ店舗の横展開を始めた(株)セブン&アイ・ホールディングス。CO₂排出削減に向けた三つの柱に省エネ・創エネ・再エネ調達を掲げる。グループの店舗運営に伴うCO₂排出量を2050年実質ゼロとするため、2030年目標を昨年5月に30%から50%削減に改めている。

組織体制を変え、取り組みを加速

小西 今日貴社がどのような考え方で脱炭素チャレンジを行っておられるかお聞きしたいと思います。まずは、CO₂排出量の実態から教えてください。

釣流 私ども(株)セブン&アイ・ホールディングスは、国内・海外でのCVS事業(セブン-イレブン店舗)、イトーヨーカ堂をはじめとするスーパーストア事業、そごう・西武の百貨店事業、セブン銀行やセブン・カードサービスといった金融関連事業、赤ちゃん本舗ほかロフトなどの専門店事業などの多種多様な店舗形態を持ちます。グループでの国内店舗数は約2万2600店舗、1日あたりの来店客数はおよそ2240万人。CO₂排出量は国内小売りでは最大となっています。オリジナル商品のプラスチック使用量が国内生産量の1%以上のシェアがあることを例に挙げても、私たちグループの成長と同時に環境負荷を発生させていることを強く認識しています。

小西 排出量が多い中、店舗の脱炭素化、再

生可能エネルギーの調達、またFSCやMSC認証といった製品の持続可能性にも早くから取り組んでこられたという印象があります。

釣流 私たちは長年、「お客様」「取引先」「株主」「地域社会」「社員」に信頼される誠実な企業でありたい」という社是の実現をめざし、持続可能な社会と企業の持続的成長を一体的に捉えて真摯な取り組みを貫いてまいりました。2015年からは環境を含む五つの重点課題をSDGsと紐づけ、具体的な活動への落とし込みにもつなげています。

そうした中、環境宣言「GREEN CHALLENGE—2050」を発表したのは2019年5月のことです。グループの店舗運営に伴うCO₂排出量を2050年に実質ゼロにすること。セブンプレミアムを含むオリジナル商品で使用する容器をバイオマスまたは生分解性、リサイクル素材などの環境配慮型素材を100%使用すること。食品廃棄物は発生原単位(売上百万円あたりの発生量)で2013年比75%削減し、食品廃棄物のリサイクル率を100%にすること。オリジナル商品で使用する食品原材料は、持続可能性が担保された材料を100%使用すること、という四つのテーマを定め、2050年までに実現をめざすものです。

小西 発表は政府がカーボンニュートラルを宣言する前のタイミングですが、社内ではどのような議論が行われていたのですか。

釣流 私は環境宣言発表の2カ月前まで(株)そごう・西武に在籍しておりましたので、着任してすぐの発表となりました。今、振り返って

もこれはギリギリのタイミングだったと思います。多くのお客さまに支えられている企業として、社会に在り方を示す環境宣言は必須。「遅れている」という焦りがありました。

実は、前段の取締役会においてCO₂排出削減の目標は80%にとどまっていた。ゼロが見えた段階で引き上げていこうという考えがあったからです。それでもゼロを示せたのは、多くのお取引先からのお声。また、買いものに来てくださる顧客の意識が非常に高くなっていることも強く感じていました。こうしたつながりが、私どもを突き動かす原動力になったことは間違いありません。それまでCSR統括部が担っていた環境に関連する取り組みは、グループ全体の底上げを図るべく「サステナビリティ推進部」へと移行させ、組織体制の変化を取り組みの加速へとつなげています。

経済性と環境性を両立する店舗

小西 先ほど東京都青梅新町にある店舗を視察させていただきました。店舗に関する取り組みは、喫緊の課題とされているCO₂排出量削減に対する象徴でもあると思います。

釣流 セブン-イレブンの店舗では、これまでに純水素燃料電池の採用や路面太陽光パネルの導入といった、さまざまなCO₂排出削減の取り組みを行ってまいりました。青梅新町店は、そうした経験を踏まえ、最新の設備と技術を取り入れた標準化が可能な普及モデルとなっています。

例えば、差圧センサーを設置することで店内気圧を「正圧」に保ち、空調効率の改善を図ることができる省エネ設計、冷蔵・冷凍機の冷却運転時に自動フィルター清掃を行うことで目詰まりによる負荷上昇を抑制する省エネ設備を採用しています。屋根には出力35.6kWの大容量パネルを設置するだけでなく蓄電池を併設しエネルギー自給率を高めています。

小西 全体の印象として、とても温かみがありました。

釣流 この店舗は木の軸組みでつくられています。断熱性・機密性を向上させ省エネを実



省エネ・創エネ・蓄エネ設備をさまざま組み合わせた店舗展開を行っている(写真は横浜市内のセブン-イレブン店舗)

現させる他、LED配灯の見直しや防滑性の高い床材を使用するなど、従来の店舗にない工夫と省エネや機能性を伴うつくりになっています。店舗はお客さまが求めるものを陳列するため変わっていきます。最近は冷蔵・冷凍食品の取り扱いが増えており、対応設備の増設により、電気使用量も増加しています。このことから電気使用量を削減する省エネ化が欠かせません。経済性の実現とCO₂排出量54%削減を実現した省エネ店舗の拡大は、非常に意義深いものと考えています。

収録日：2021年10月8日

取材後記

今から4年前。店舗駐車場の路面に太陽光パネルを埋め込み、ハイブリッド車の電池で蓄電する実験をされたセブン&アイさんに衝撃を受けました。そして今回。それはほんの一例で、全方位に店舗の省エネとエネルギーの平準化を実現されていることが分かりました。省エネが脱炭素化の第一目一番地！ コツコツと続けられる取り組みが時代を切り開きます！（小西雅子）



(つりゅう まゆみ)
株式会社西武百貨店入社(現株そごう・西武)。婦人雑貨部や販売促進部などを経て営業部門、執行役員として各店店長などを歴任。2019年3月より現職。グループ環境宣言「GREEN CHALLENGE—2050」の達成を推進する。



(こにし まさこ)
国連の気候変動会議などでの国際交渉や、国内の気候変動・エネルギー政策提言に従事。温暖化をめぐる経済動向や世界の温暖化対策にも精通する。気象予報士、博士(公共政策学)。昭和女子大学特命教授。